

大和高原の巨石（磐座）伝承

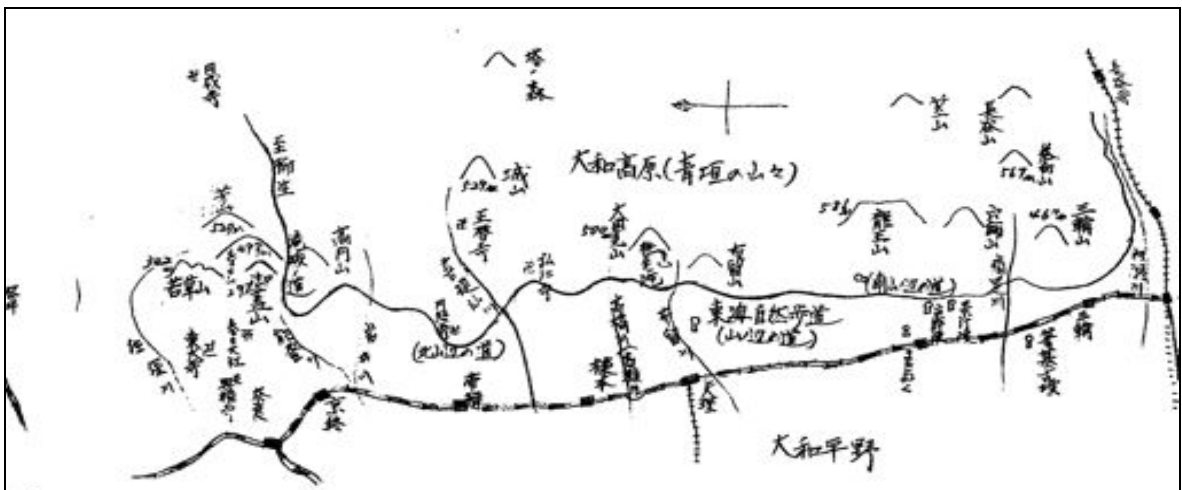
続五

考えてみよう。

春日山は奈良公園の地域内に含まれている特別天然記念物春日山原始林として永久保存のために県公園課の管理する山である。承和八（八四一）年伐木狩猟が禁じられてから原始林の神山として保護されてきた。神護景雲元（七六八）年藤原氏が氏神春日の神を祀ってから春日山を神山的に感じている人も多いが、古代から人々の生活の場、信仰の山として今日に引き継がれた春日山について、磐座信仰からの変遷について

奈良県の中央を流れる大和川の水は周りの山々から流れる水を集めるのであるが、南西部は金剛・葛城山を源に、北西は生駒山など、南東は飛鳥、初瀬方面、そして東北部は大和高原を西に流れる水である。なかでも春日山を源とする佐保川、吉城川、能登川、岩井川がいずれも奈良市内を流れて大和川に合流、大阪湾に注ぐ。日本一汚れた川であるのは大変残念であるが。春日山山麓は広大な自然の公園で鹿が芝をせっせと

食べる風景は奈良を訪れる人達には印象深いものであろう。再にも四季それぞれの桜、藤、百日紅、馬酔木、紅葉が楽しめる日本屈指の公園である。また公園内を南から白毫寺、新薬師寺、志賀直哉旧居、春日若宮、春日大社、手向山八幡宮、三月堂、二月堂、若草山と続く絶好の見学ハイキングコースである。春日山原始林内は貴重な自然林で世界遺産に指定されているので奈良県公園課の許可を得ないと入山する事は出来ない。新薬師





滝坂の道

寺北側を東へ春日山南側谷を登る道が剣豪柳生の里へ通じる「滝坂の道」である。石畳や木の根子のある坂道を原始の森を楽しみながら寝仏や夕日観音、朝日観音、首切り地藏、穴仏などと出会いながら歩く南都と大和高原を結ぶ道だった。柳生十兵衛が常に通った道、剣豪たちも通ったテレビに出てくる街道なのである。古代の人達は「こう山」「か山」と呼んだのであつたろうが、のち全体を春日山と呼ぶようになる。大和高原、大和平野側の人たちは共に自然

豊かで水源の山、太陽や月の出る山、大和高原からは沈む山であった。東側の誓多林町の縄文遺跡は八千〜九千年前のもので、当時から大事にしていたと想像できる。縄文遺跡北五十米余りの丘（現在茶園）には奈良時代の誓多林寺が建っていた。礎石は茶畑開墾のとき発見され、そのまま埋め戻されている。春日山と呼ぶのは「花山」四九八米、香（高）山、そして古代は芳山五二〇米も含んでいたと思う。なぜならこの谷間が佐保川の源流で少し下流が鶯滝である。春日山を管理する見張り所芳山交番所が源流近くに設置されている。花山、香（高）山から西側に下がったところに笠を伏せた形の御蓋山がある。大和平野側から見ると春日山の森で区別がつかず見逃している人が多い。香山山頂近くに凝灰岩を切り出した跡の石窟に平安末期の久寿二（一一、一五五）年、保元二（一一、一五七）年の貴重な穴仏がある。このあたりは岩山で磐座信仰の場所であったが、平安時代に修行の場所とな

り、末期に仏像が刻まれ修行と信仰の聖地として引き継がれた。この場から南へ数百米の所に地獄谷と呼ぶ岩群があつて、石窟の中に彩色を残した線刻の平安石仏がある。

前回（続四）に記した塔の凝灰岩の石塔も春日山から切り出された。修験場としては格好の場所であった。その条件は古代からの磐座信仰、都から近くでありながら山岳原初の別世界、山の自然条件の神秘さ、つまり岩、谷、水、木、そして雷の発生が多いなどが熊野や吉野のミニであった。真言密教の加持祈祷の修行に最適であった。東北に続く芳山には大変珍しい二尊石仏が山頂近くの堂跡に建っている。奈良時代の石仏像として史上珍しい如来石像という。そこから三十米ほど登ると山頂で、岩群があり木の根が絡まっても神秘的な感じがする磐座である。そこに行く途中に「大乘院殿御領山」脊柱が残っていて平安〜中世興福寺大乘院（一、〇八七年隆禪の送検した興福寺の子院（塔頭）門跡寺院と



芳山の石像

なり同塔頭一乗院と共に興福寺別当を独占した）が支配した名残として貴重である。春日山の恵、生活の場、信仰の山が具体的な名前前で現れてくる。神名帳に鳴神（鳴雷天水分神）神社と記され早魃の年、また豊作祈願に朝廷が幣帛した神であった。春日山はとても雷の発生が多く毎年落雷で大木が燃える、つまり竜が雲をよび雷を発生させ雨を降らす山なのである。延喜式神名帳記載の鳴神神社、そして修験僧らによって神仏習

合し神宮寺が建てられて行つたことについて後にまとめて記すことにし、春日山が古代人の生活の山から人々の信仰の神、豪族支配へと移つていく過程をたどつてみたい。

春日和邇氏の支配下にあつたときは、和邇氏竜の神が祀られた。四世紀後半から五世紀に築かれた佐紀盾列古墳群は、春日和邇氏を中心にくられた古墳と言われ、王権(朝廷)を構成した人達のものである。平城京を造る時取り壊された部分もある。その後阿部氏(阿倍)が御蓋山に神を祀っている。なぜ阿部氏に引き継がれたか明確なこととはわからない。阿部氏は大彦命を祖とする。大彦命は伝説的などころもあるが四道將軍の一人で北陸に赴いた武人である。磐座がその名残の跡と思うが山全体が神山だったのだろう。「遣唐使祠神祇に蓋山之南」とある。御蓋山の浮雲宮に安全祈願している。御蓋山の月を思い唐で郷土を詠んだ阿部仲麻呂のうた「あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月か

も」でよく知られているように阿部氏と特別の関係があつた。前後した若草山山頂に百米余りの前期後半の前方後円墳が築かれた。一望する位置にある。清少納言が「鶯塚」と「枕草子」に書いていることから鶯塚と呼ばれている。近くに円墳一基、方墳二基がある。春日山中にも築かれていていると思う。大和高原の山々の山頂にも古墳が造られているので共通している。天に近く、聖地(神山)と地域支配、靈意識によると理解する。

春日の森の昔話のその二に「耳が遠いので損をした神様」と云うのがある。武甕槌神は御蓋山の西麓に広大な神地を構えようと、土地の地主神である榎本ノ神様に「この土地を地下三尺だけ譲つてくれないか」と頼み込んだ。榎本ノ神様は耳が遠くて地下と言う言葉が聞こえなかつたので「三尺ぐらいお安いご用」と承知した。ところが広い土地に社などが建ち始めたので榎本ノ神様がびつくりして「話が違うじゃないかと」

と申し入れたところ武甕槌神は「私は地下三尺と言つたのですよ」と境内の樹木の根も地下三尺より伸ばさない。あなたが住むところが無いので困られるだろうから私と一緒に住んでください。」と広い土地を手に入れてしまった。春日大社の摂社に榎本神社が回廊内西南隅に祀られている。ご祭神は猿田彦としている。

元の春日山の地主神であつた。藤原氏のたくみな策で藤原氏の祖神が祀られると色々なことがあつたと思われるが消されてしまつて、以後は藤原氏一色となつていく。特に興福寺と習合することで大和支配を進めて行くことになる。さて、春日大神は神護景雲一(七六八)年藤原氏の氏神として創建された四棟造りの立派な神殿は春日造りとして神社建築上知られている。第一殿には鹿島神宮(茨城県)から鹿に乗つて来られた。奈良公園の鹿は武甕槌神の乗つてこられた鹿ということだにしている。第二殿は香取神社(千葉県)から経津主命を迎えお祀りした。第三殿は

藤原氏祖神天兒屋根命、第四殿はその姫神である。この二神は枚岡神社から来られた。つまり春日大社大鳥居を西へ直進の三条通り、更に西に延びる道が生駒山の鞍のようなくぼんだ所暗峠を大阪側に下ると枚岡神社で、東西に通じる藤原氏の祖神の道である。巧みな藤原氏の謀策によつて藤原氏の支配へと移り、春日社、興福寺へと引き継がれていくのであるが、庶民の願い信仰は水神や雷神になり龍神になり真言密教の呪術と神が集合し、社と寺院となつて仏教色主導的な流れの中で明治に至るのである。香(高)山の神は鳴雷神について、延喜式神名帳添上郡三七社の中に鳴雷神社とある。写真の社の横は平地で奈良時代早期に建てられた香山堂が建つていたので山岳寺院として神宮寺と修験の場の役割を果たしていた。神社下に閼伽井(竜池)がある。井というより池である。この鳴雷神社香山堂竜池で早魃の年、雨降りが続くとき雨乞い、雨止めの祈禱が近隣山麓の農村がそれぞれの

方法で営んできた。東方四kmの矢田原村は昭和三十年頃まで雨乞い参り、神社に祈禱し竜池の水を杓で「かえ」恵みの雨の「願かけ」をしたという。古くは社僧が般若心経を唱え呪術的仏法要素をしたのであろう。今まったく忘れられたが綿綿と続いて来たのである。香山のところに大乘院領を示す石柱がある。龍池を少し降った所に高山神社が祀られている。そこに石造水船、長さ二米一八cm、幅七二cmで側面に「東金堂施入高山水船也正和四(一三二五)



年乙卯五月日置之石工等三座」の陰刻銘がある。花山には「西金堂長尾水船文和二(一三五三)年巳癸三月日置之」の銘がある。また西念なる僧が「願かけ」で残した石塔婆には「相当此年炎干過去之間為国土豊饒於断食七箇日参籠高山社仍結日降法雨然間為果宿願於春日社壇奉転読法花妙典一千部成現当二世悉地仍注結縁衆交名奉納塔婆内而已正安三(一三〇一)年辛丑九月日勸進沙門西念」と刻んだのが竜池から発見された。雨がその年の農村生活を左右するだけにそれは真剣そのものであった。これは鎌倉時代の様子を知る貴重な資料である。農民もだが領主側のほうが税金に関わることで、一番雨を願う、長雨の止めを祈ったことだろう。話は本論よりそれが東へ三〜四百米登った所が峠という茶屋で知られる。その東南側から南の尾根伝いに一k〜二k程空掘りが続いている。地元の人の話は興福寺大乘院が寺院領と村の堺と鹿の害が及ばないように掘ったものであると言いつわって

いるのだという。私は古市氏が古市城を逃れ大和高原の誓多林や大平尾に潜んで城を築き挽回を期している。その時の軍事的空掘ではないかと考えてみた。古市澄胤は文明七(一四七八)年官符職に付き筒井氏と抗争を続け、明応六(一四九七)年十一月筒井氏に敗れ大和高原に退いている。

春日山の中央に笠を伏せたような山御蓋山は香山を西に降る二九三米の山でつい見のがしてしまう。香山と御蓋山の谷間に切り堀があり、その道を越えると吉城川の流れる谷へ

出る。切り堀の手前を西へ登ると御蓋山山頂である。山頂には本宮神社が祀られている。本宮峯または浄雲峯ともいい阿部氏が祀った地主神、つまり本の宮の意味かと解する。社の裏方は磐座で春日和邇氏、阿部氏が聖地とした場所だ。春日社が祀られて撰社、末社となった。御蓋山は神を祀る、神が降り宿るに相応しい所である。古代この広場で事あるごと願いの祭が行われたようだ。春日の神が祀られて歴史の中から消えてしまった。庶民は古代信仰を仏教者の修験と呪術と結びつきながら春日水神、春日龍神を恵の山春日山として長く引き継いで来た。近年農業の水利の改善により雨乞い、雨止め、神(自然)の恩恵に対する觀念が薄くなり、忘れられつつある。世界的に環境問題が最大の課題になっている時、古代人から引き継いで来た磐座や、山、水源、川そして雨乞い行事を考えることで自然と共存する大事さを考え直したい。

了